
紅十字

流音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅十字

【Nコード】

N0165Z

【作者名】

流音

【あらすじ】

美術部に入ったことで、あずまなお吾妻七生の運命は少しずつ変わっていく。契約に基づき、何代にも渡って出会い続けた花嫁と吸血鬼の約束の物語。

現代ファンタジー。

プロローグ

冬も終わりを迎えた頃。

肌を刺すような冷たい空気も、温かくなってきた。

しかし、まだまだ夜は寒い。

屋上で、強い風を身に受けながら一人の少年が立っていた。

月の光に照らされて、神秘的に輝く白い髪。それをあやすように風が遊ぶ。

少年が呟いた。

「この空も来週からは見れませんか」

少年は金色の目を細めた。

視線の先には、悠々と輝く満月を見上げて佇む青年。

少年の目に映る、誰もが溜息を吐くというこの夜景でさえ、青年の美しさに叶わない。

闇夜とはまた違う暗さを称えた黒い髪、そして背で隠されているためわからないが、切なく光っているであろう紅い瞳。

少年よりも広いはずの背中さえ、見るたび儚さを増しているようだった。

青年は少年に背を向けたまま言った。

「そうだ。しかし、空は繋がっている」

「クリスマス様」

クリスと呼ばれた青年は優しく続けた。

「新しい名前はお前が考えてくれたんだろう。明日からはその名前
で呼びなさい」

「はい、
様」

少年は跪く。

恭しい動作はない。ただ、ただ、自然な動きで。身体が認める主
だけに。

ブログ（後書き）

続くか分からないのネタ集から。

ほそぼそと続きを書いておりましてので、ノロノロの見切り発車な更新で参ります。

第一話

【1話】

「いらっしやい 仮入部？」

美術室の扉を開けると柔和な笑みを浮かべた男性が一人。元は力ンバスに向かっていたであろう手を休めて私を見ていた。

眼鏡の度がきついのか瞳の奥はボヤけている。

けれど、その視線はひどく優しくかった。

窓の隙間から風が入り、ゆらりとカーテンが揺れて温かなオレンジが波打っている。

まるで夢みたいな光景に私はうっとり目を細めた。

「君、一年生だね？」

ほづけていた間に移動したのか気付くと目の前に男性は立っていた。目線が私よりも少し高い。

慌てて声を出すけど焦ってしまい少し上擦ってしまう。

「は、はい。一年の吾妻七生あずまなおです。今日は仮入部に来ました！」

男性はおかしそうに笑った。

「俺は二年の四宮出^{しのみやいずる}。とにかく、中に入っておいで」
「はい！」

そういえば扉を開けたまま固まってたんだっけ……。
恥ずかしい気持ちを隠しながら先輩の指した椅子に座った。
木製の四角形の椅子は冷たくも温かくもない。

「大抵俺しかいないんだこの部活は」

私の隣に腰を下ろして先輩は呟いた。

この森園男子高等学校の文化部で美術部は科学部に次いで有名だ。
きつと、毎日大勢の部員が熱心に絵の練習をしていると思っていた。
だから先輩の一言にとても驚いた。

思わず先輩の目を見つめてしまう。

疑り深いと思われただろうか。

私の視線を気にする様子もなく先輩は話を進めていく。

「コンクール前にならないと他の部員は顔出しに来ないんだ。
だから、基本は気楽に自分の好きなペースで作品制作してくれて
構わないから」

「あの、質問してもいいですか？」

キョト、と首を傾げる先輩に促され疑問に思ったことを口にする。

「技術指導とかしてくれる先生は……？」

「顧問には堀先生がいるけど……」。

先生自身も画家活動をなさってるから、たまにしか来てくれないんだよ。

だから一年生の指導は俺を含めた二・三年が受け持ってるけど

」

一旦言葉を止め、ズリ落ちた眼鏡をあげながら困ったように笑った。

「見ての通り俺しかないない。

ま、俺にできる範囲になるがちゃんと技術指導する。

だから安心して仮入部してくれ」

「はい」

よかった、そう呟きながら先輩は窓に目をやった。

私もつられて視線を外に。

空は藍色に染まりかけていた。

「もうこんな時間か。ごめんな、俺ばかり話してしまっ」

申し訳なさそうな先輩に両手を左右に振って否定する。

「そんな。私こそ遅い時間に来てしまつて……。」

それに、四宮先輩の絵の邪魔してしまつたし……」

「別にいいよ。下絵を簡単に描いてただけだから」

立ち上がつて片付けを始めた先輩に、何か手伝うことはないかと聞いた。

「まだ君は部員じゃないしな……」

じゃあ、鉛筆をそのペンケースに入れておいてくれる？」

何もしないのは嫌だったから、先輩のその心遣いが嬉しかった。

片付けを済ました後、私と先輩は校門の前で別れた。

先輩は徒歩で私は自転車通学。しかも全くの反対方向だ。

今日先輩と出会つたばかりだけど、別れるのが少し寂しかった。

「あ、あの、四宮先輩！」

「なに？」

一日で大分見慣れた先輩の和やかな微笑み。

だけど、見慣れたといつてもそれが綺麗なものは変わらなくて。熱にじわじわと身体が包まれるのを感じながら私は言った。

「……明日も、明日も先輩はいますか！」

突然の大きな声に驚いたように振り返る先輩。

高校に入学する前の私ならすぐに謝ってしまっけど、別に悪いこととは言っていないから。

でもこんなことを言うのは初めてで、ドキドキと胸がうるさい。強気な発言とは違う目で先輩を見る。

最初は驚いて固まってた先輩だけど、すぐに目を細めて笑った。

「もちろん。明日もいるよ。言っただろ？ 大抵はいるって」「……はい！」

元氣よく返事すると、先輩は口に手の甲を当てながら吹き出した。

「っはは、吾妻君、面白い、な、君、は」

「え！？ どこがですか！」

眼鏡を少し上にずらして涙を拭いながら先輩は言った。

「内緒だよ。じゃ、また明日な」

ひらひらと右手を挙げながら先輩は帰っていく。

私はその背が見えなくなるまで校門から動けなかった。

そして先輩の色素の薄い瞳が強く印象的だった。

第一話（後書き）

物語の主要人物である、先輩登場です。
ちなみに、私は美術部・黒髪・眼鏡は好物です。

先輩視点

【i】

美術部の後輩になるかもしれない吾妻七生。

彼女に角を曲がるまで見送られ、四宮出は溜め息を吐いた。

今日はいつもより疲れていた。

まさか仮入部に新入生が来るとは考えていなかったのだ。しかも、よりによって自分のいる時間帯に。

仮入部の時間内ではあるが、普通はもっと早い時間に見学するだろう。

だからあえて普段よりも部活に行くのを遅らせていたというのに。

本当に今日は疲れた。

自分は人 特に年下 が苦手なのだ。

これから吾妻の世話をしなければいけないかも、と考えるだけで気が重くなる。

「いや……」

出は頭を振った。

吾妻は他の新入生とは違う。

出は思い出していた。

吾妻が美術部に来たときのブーツとした顔、自分を見つめるオドオドとした表情。内気なのかと思えば校門の前で叫んでいた。表情があればどこコロコロ変わるのも珍しいと思う。

吾妻のことを考えているといつの間にか自宅に着いていた。思考を切り替える。目の前のドアを開け、ようやく帰宅する。スリッパを履き、玄関から続く廊下を抜けてリビングの入口で靴を下ろした。

「おかえり」

ゆらりと妖しげに光る深紅の瞳が、同系色のソファ上から出を見ていた。

艶やかな唇は弧を描いている。

「随分ご機嫌だね、イズル」

「そうかな？ 気のせいだと思うよ。それよりも」

出はソファに近付き、彼の人の額にそつと手をあてて顔を歪めた。そして眉根を寄せて不平を口にする。

「まだ熱があるじゃないか。なんで寝ていないんだ」

出が注意しても彼の笑みは変わらない。

「イズルに早く会いたかったんだよ。そんなこともわからない？」
「あなたは……本当に……」

出はソファに片足を掛け、陥るように目の前の人物を抱き締めた。
痩せた小柄な肢体は出の腕にそっと収まる。
出は彼はの首筋に顔を埋めた。少し癖のある黒い髪が耳を撥る。

「俺は貴方が大切なんです。だから　自分を大事にしてください」

力を入れすぎないように。でもできるだけ強く。
その冷たくも熱い身体を抱き締め続けた。
受け入れている彼は子供のような出を否定しない。どこか遠い目
をして己よりも大きい頭を撫でてやる。

「ほんとうに仕方のない子だね。　イズル、僕は大丈夫。今はお
前がいてくれるからこそ生きていれるんだよ」
「葉月……」

きゅつと一度強く抱き締めてから出は葉月はつきから腕を離した。
自分で今の行動は子供っぽかったと悟っている出。
軽く落ち込む出の頭をもう一度撫でて葉月は美しく微笑んだ。

「さ、元気が出たなら夕飯を作っておいで」

甘みを含んだその言葉。出は吾妻の前では見せなかった無垢な笑顔で頷いた。

先輩視点（後書き）

合間合間に先輩サイドや、他のキャラサイドの話も挿入していきます。

先輩はとんだ猫かぶり！

ちなみに、私はシヨタも好きです。

第二話

美術部に仮入部をして一週間が過ぎた。

月曜日、私は入部届けを担任に提出した。

初めて美術室に足を運んだ月曜日から、仮入部日である水曜・金曜と部室に通ったが、やはり四宮先輩しか部員はいなかった。

仮入部をした新入生も私一人。

美術部の強豪である森高へ推薦入学した新入生は少ないのだろうか……。

考えに耽っていると突然肩に鈍い痛みが広がった。

同時に視界も暗くなった。

教室にいるクラスメイトの声が大きくなった気がした。

「ちょ、誰」

「だーれだ！」

カラカラと明るい声が右耳から頭に響いた。

考え事なんか一気に消し飛ぶほどによく通る声。

顔をくしゃくしゃにして笑う姿が思い浮かんだ。

それに、声を聞かなくても背中当たっている爆弾で検討が付く。

私よりも身長は結構低いのに、胸の大きさがかなり違う。

「宗子！」

「ピロローン！ 正解だよんっ」

パツと両手を挙げて、金髪の悪戯好きは謎の効果音を口にした。そして、私の前に回り込み陽気にはにかむ。

きたそうこ喜多宗子は中学からの友達で、その時から少し変な性格だった。

「朝から元気だね……」

「あつたりまえ！　そういうナオちゃんは元気ないね。どーしたの？」

青く大きい瞳が私を下から覗き込む。

「宗子が元気すぎなんだよ」

そうかなあ？　と宗子は首を傾げた。

その際に祖父譲りだと話していた薄い金色の髪が揺れる。
長めのボブカットが彼女にとっても似合っている。

「そついえば！　明日だつて！」

「……何が？」

話の突然の方向転換に付いていけない。

今度は私が首を傾げる番だった。

宗子は青い目を輝かせて意気込んだ。

「健康診断だよー健康診断っ。ぼくたちまだだったでしょ」
「最後だからね」

健康診断は今日と明日の二日間で行われる。

私と宗子は一年五組で、前から順番に回ってくるからどうしても最後になってしまうのだ。

宗子は思い出したように言った。

「ナオちゃんって美術部に入るんだっけ」

「そうだけど……それがどうかした？」

「んー、噂だから気にすることないと思うけどね」

いつもだったら嬉しそうに何でも話してくれる宗子。だけど今はやや顔をしかめていて、言いくそうだ。美術部と聞いて浮かぶのはやっぱり四宮先輩のこと。四宮先輩は関係ないと思うけど、なぜか妙に不安を感じた。

「何？ 気になるから言って」

「ナオちゃんが良いなら言っけど……」

珍しく渋る宗子に少し緊張しながら耳を澄ました。
宗子は重々しく口を開いた。

「美術部の四宮出って先輩の噂なんだけど。ナオちゃん知ってる？」

妙な予感は的中したらしい。

それにしても噂って何だろう……。

「知ってるよ。言わなかったっけ。

この前美術部に一人しか先輩いなかったって」

「その先輩かあ……」

宗子は左耳の上を親指でグリグリと擦った。

「まあ噂ってアテになんないからさ」

「早く言つてよ」

私はもう焦れつつくて、宗子に先を促した。

「なら言つよ？ 四宮出先輩ってね 女好きのホモなんだって」

「……………え？」

宗子の放った言葉の意味がいまいち理解できない。
見かねた宗子がかもう一度繰り返した。

「だーから、四宮出先輩は両刀だって噂なの！」

それでも呆気にとられている私に宗子は口を尖らせた。

私はついさっきまで、真剣に噂の内容を考えていた。不安を感じたりもした。

けれど、それは必要なかつたみたいだ。

何もかもが可笑しくなって、私は勢いよく吹き出した。

それはもう文字通りお腹を抱えるほどに。

突然笑い出したせいか、宗子を見る見る内に不機嫌になった。

「そんなに笑わなくなつていいじゃんか！」

「だって、四宮先輩が両刀だなんて……」

「ちゃんと内容も聞いてよ！」

このまま笑い続けていれば確実に宗子は拗ねる。

中学時代での経験を活かし、そう判断した私は話をそらすことにした。

「明日が健康診断ね、わかった。ついでに身長も測ろうね。

宗子の身長伸びてるかもしれないよ」

わざとらしかったかもしれない。

でも宗子は低い身長を気にしている。きっと喰らい付いてくる。

予想通り私がこの話題を出した途端、宗子は目をつり上げた。

「もう！ ちょっとボクより身長高いからって意地悪言わないでよね」

最初は怒った様に見えたが、宗子はふふん、と得意気に言った。

「でも今回は凄いもんね！ ぜーったい身長伸びてる！ ボクは確信してるっ」

適当な相槌を打とうとした時、前の扉から教師が入ってきた。

休み時間は既に過ぎ、授業が開始していたみたい。

しかし、数学の教師が遅れてきたため休み時間のような雰囲気だったらしい。

まだ話したりない！ 宗子の顔を見れば手にとるように分かった。

私は宗子の少し猫っ毛な髪を一撫でし、席に戻るよう促した。

「……また後でねっ」
「うん」

表情が本当に不満そうで。

私は苦笑しながら席に着いた。

入学当初は緊張して真面目に取り組んでいた授業。今もきちんと教師の話を聞き、ノートもとっている。しかし、どこか気持ちが緩んでるような気がする。

教師に問題を当てられるわけでもなく、ただ流れの一部として、気が付けば放課後になっていた。

私の席は教室の一番寝やすい位置にある。

窓の外を見れば雨が降っていた。

「うわ！ 雨降ってるよ……ボク傘持ってきてないのに!!」

宗子が私の机の前で叫んでいた。いつの間に移動してきたのだらう。

彼女の席は一番前で、私と同じ列だ。

「傘貸そうか？」

私は自転車通学だ。

しかし、雨の日はバスで通っている。バス停までは徒歩五分だから走れば三分とかからない。

宗子は徒歩通学で片道二十分の道のりを毎日通っている。

「 知らないよつ。ナオちゃんが風邪ひくじゃん」

「宗子の方が風邪ひく。私はバス停まで行けば大丈夫だから」

「やだ。ぜーったいやだ！
傘持って来なかったのはボクの責任なんだから。ナオちゃんは気にしないでいいよ！」

頑な態度で嫌の一点張り。

こうなった宗子には何を言っても無駄だ。

中学のあの一件以来、宗子は私に負担をかけるのを嫌がるようになった。

私自身はこれくらいで風邪をひいたりはないのだけれど。

「わかった。なら、校門までは一緒に帰ろう？ 気休めにしかならないけど」

「今日美術部ないの？」

そう切り返されて美術部の存在を思い出した。

四宮先輩は自由参加と言っていたけれど、新入生なのに何も言わずにいるのはまずいだろうか。

悩む私を見て宗子はあっけらかんと言った。

「ナオちゃんは美術部に行きなよ。ボクは走って帰るからさ！」

「ダメ。美術室に寄って帰る。先輩に言えば大丈夫だから」

念を押すように、ね、と微笑む。
観念したように宗子も笑った。

「じゃ、帰るっか」
「うんっ」

第二話（後書き）

中学からの友達、喜多宗子ちゃんが登場。
ボクっ子です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0165z/>

紅十字

2011年11月30日22時55分発行